



穏和な笑顔で親  
しまれた清家清  
さん(1989  
年12月

き、切り捨てる  
のではなく、両  
者をより高い立  
場で矛盾無く解  
決すること。こ  
こでは「アウフ  
ヘーベン」は、  
伝統と現代のデ  
ザイン融合を意  
味する。

「違いの分かる男」建築家・清家清を初めて目にしたのは、コーヒーのテレビCMを通してであった。画面の背景に、双曲放物面シェル構造の屋根が、軽快で優しいコーヒーブレイクの時空間を象徴する存在として映し出されていた。それは、清家さんの柔らかな人柄とマッチして、見る人の美意識をくすくすさせた。

## 清家清さんを悼む

久保田要

「環境」と「人」との愛に満ちた創造的な関係で満ちている。

## 伝統、感性、現代をデザイン

ドイツの巨匠W・グロピウスは、「日本の住宅の伝統」生活空間と、当時の「現代建築」機能主義を融合させた清家さんの日本的なデザイン力を絶賛し、後に自らの事務所招くことになったのだという。

清家さんと話をしていると「アウフヘーベン(止揚)」というドイツ語がよく出てくる。相對立する二つの考え方があると

「文化奨励賞」が、実は期待感を込めたしつかりした賞として位置づけられていた。

一方、山梨県立宝石美術専門学校長として、宝飾デザイナー

山梨県建築文化賞は、審査の選定過程で、建築文化のシンボルとしてうたい上げられ、その年の評価をするのだが、清家さんは審査委員長として、すべてを高い次元で評価をしていた。切り捨てるのではなく、すくい上げるのである。その意味で、「文化奨励賞」が、実は期待感を込めたしつかりした賞として位置づけられていた。

一方、山梨県立宝石美術専門学校長として、宝飾デザイナー

いま、山梨のデザインインフラの黎明(れいめい)期がここに終わろうとしている。折しも景観法が制定され、これから施行されていくとき、残されたわれわれは、山梨のデザインマインド醸成に、福々しい笑顔の清家さんがまいた種を、もう一度拾い集めてかみしめ合いたい。

ああーあのユーモアたっぷりのあの洒落(しゃれ)はもう聞けない。(県建築文化賞審査委員・県建築士会理事)